

富岡謙蔵生誕一四〇年記念

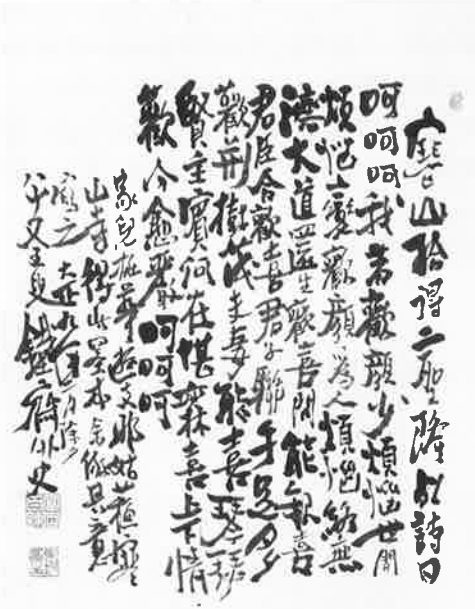
鉄斎と謙蔵

平成25年4月2日〔火〕―6月16日〔日〕

前期 4月2日〔火〕―5月6日〔月・祝〕

後期 5月11日〔土〕―6月16日〔日〕

10時～16時 月曜日休館 但し4月29日・5月6日は開館 翌日休館



京都室町一条の自宅にて（大正2年頃）
前列左から弥生、益太郎、鉄斎、冬野
後列左から夏枝、とし子、謙蔵、春子

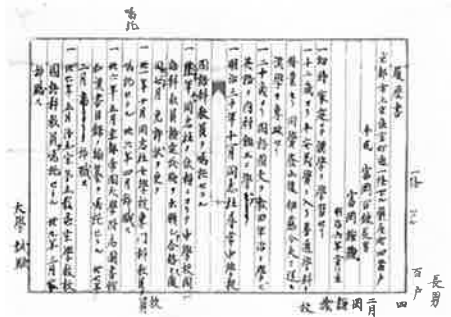
富岡謙蔵（1873～1918）は、近代文人画の巨匠富岡鉄斎（1836～1924）の長子で、邪馬台国近畿説の先駆的な名著『古鏡の研究』（No.87）をもって名を遺す。しかし今日、その生涯や業績について言及されることは少ない。本年は生誕140年にあたり、これを記念して鉄斎美術館では「鉄斎と謙蔵」展を開催する。蔵書万卷のうえに成る富岡家の学風の一端を、鉄斎作品はもとより初公開の謙蔵関係資料、また昭和期最大の入札会で惜しくも散逸した鉄斎・謙蔵親子のコレクションになる旧富岡文庫を通して紹介したい。

なお本稿は、謙蔵46年の知られざる生涯と業績を回顧し、ささやかながら顕彰に努めるものである。

富岡謙蔵小伝 富岡謙蔵は明治6年（1873）2月17日、京都市上京区東三本木の頼山陽旧居「山紫水明処」に生まれた。父鉄斎には亡妻達との間に長女秋がいたが、後添えにむかえた愛媛県佐々木禎三の三女春子との間に授かった唯一の子であった。謙蔵の誕生を大田垣蓮月は大いに喜び、春子宛の書簡に「天が下の大人、けん女の御中の御子ゆゑ、日本一の人物になりいで玉ふべし」と将来を嘱望したという。名ははじめ建三のち謙三、明治40年代前半より謙蔵と称し、字を君搗、号を桃華といった。略歴については不明な点も多いが、おおよそのことは京都帝国大学に提出した履歴書草稿（No.63）から知られる。また木崎好尚編「大阪朝日新聞社員等署名帖」（明治37～38年）には「父は鉄斎、母春子、明治六年二月十七日京都鴨涯山陽外史の旧居に生る。幼より多病にして文部省の教育を受けず、独学固陋自守りて、敢て世の風潮を顧ず。蔵書萬巻多きを貪ってやまず。優遊自適漸く老いむとす」とあり、謙蔵が自らについて記した数少ない資料である。

謙蔵の句読の師は父鉄斎であった。鉄斎は謙蔵を小学校にも通わせず自ら教育し、10歳の頃には『資治通鑑』を読みこなすほどであったという。《習字帖》（No.8）は、「千字文」（断簡）、平安時代の漢詩人藤原明衡の「明衡往来」と中国北宋の文人蘇東坡の「登州海市詩」からなる帖で、鉄斎中期の書風をよく伝える作である。識語には「謙児の為に之を書す」とあり、鉄斎手ずからこうした教材を選び与えていたことがわかる。明治9年、鉄斎が大鳥神社宮司を拝命すると、しばらくして春子と謙蔵も堺に移り住んだ。このころの鉄斎の作品には「泉州茅渟海の上の寓居に於て漫写す」と識すものがあるが（No.4、5）、世界に開かれた大阪湾に面した地で謙蔵は幼少期を過ごしたのである。14年に伯父の伝兵衛敬憲が逝去すると、父鉄斎は大鳥神社に辞表を提出して帰京する。そして応仁の乱で焼失した一条兼良の邸宅と書庫「桃華坊文庫」があった上京区室町一条下ル薬屋町に買った住居が、親子の終の棲家となった。謙蔵の号「桃華」、鉄斎の室号の一つ「桃華窟」が、この地に由来することはいうまでもない。

明治17年、12歳となった謙蔵は京都在住の「官家士族」等の子息のために設立された平安義塾に入学するも、翌年には早々に終業し、退塾後は父の友人で平安義塾の教授であった伊藤介夫に漢学を学んでいる。蔵書家として知られ、かつ幕末に特使派遣の通訳として清へ渡航経験を持つ介夫に学んだことが、謙蔵の中国趣味形成の一因となったことは確かであろう。一方「万里の路を行く」ことを実践した鉄斎は、実証に基づく学問を教示することに努めた。たとえば、明治23年の4月から7月にかけての東京・甲府方面を巡る旅に謙蔵を同行、記録をつけさせているが、「甲州旅行記」（No.62）のうち一冊には鉄斎が細部に渡って校閲し、最後に「偽疑駁之事ハ成丈省ク謙遜カ可軋生不然ハ不遜ニ陥ル好辞ノ誹ヲ得ル」と戒めている。京都への帰路、親子は伊勢物語にきこえた古道葛の細道を踏査した。この折、静岡の宿で鉄斎が執筆したのが《古うつゝの鶯の細道図》（No.7）で、古絵図に拠った横長の画面の上部には『伊勢物語』から一文を引き、急峻な峠道の各所には自身の印象や覚え、巻末には踏査行を識している。古典や文献資料を踏まえたうえで、緻密な観察と厳密な考証を為すことは文人鉄斎の研究手法であり、謙蔵は父の薫陶を受けながら己の学殖と見識を培ったのである。



63 富岡謙蔵履歴書草稿

明治25年、謙蔵20歳の頃からは国語国文を大阪の敷田年治、英語を不敬事件のあと一時期京都に住んでいた内村鑑三に学んだ。良き師との出会いは学問的領域を広げ、26年には家蔵の上田秋成室遺草『夏野の露』を翻刻して発行した。おそらくこれがはじめての刊行物と考えられる。また時期は定かでないが、30年10月末まで東京に遊学している。栗田寛に就いて国史学を修めたというのもこの間と思われ、鉄斎に宛てた書簡（No.65）には「小子儀当地にてハ内村師を始、老大家達の不一方愛顧を蒙り候」とあることからも有益な遊学であったようだ。帰京後すぐに同志社尋常中学校国語科教員、翌年には同志社女学校専門科教員の職を得、この頃生涯の伴侶となる中野としと出会う。両親を早くに亡くしたとし子が寄宿する同志社女学校には、「愛妹」宛に課題を課した謙蔵の手紙が度々届けられ、足かけ三年を経た33年7月に結婚する。当時としては珍しい恋愛結婚であった。結婚を祝した《双寿搗餅図》（No.11）は、父鉄斎が尉と姥が餅つきをする図を描き、父の友人谷鉄巨が賛を寄せる合作である。翌年には長女弥生が誕生し、二女冬野、長男益太郎、三女夏枝の四子を設けた。

明治30年代半ば、鉄斎が70歳代を前後とした頃から画家としての名声は益々高まり、富岡家には書画の依頼者が押し寄せる一方、乗じて暴利を貪らんとする輩が集まってきた。謙蔵は鉄斎の執事を務めるようになっていたが、対処策としての高慢な態度は、快く思わない者たちによって口さがなく言いたてられ新聞記事になるほどであった。万事において父鉄斎のことを第一とした謙蔵は、依頼者との交渉をはじめ、日常の書画制作の助手のみならず、短期の調査旅行や屏風や襖といった大作の依頼先への随行、また鉄斎のライフワークである古人の顕彰活動の一環としての石碑建立や追善供養の執行に尽力し、さらには交際範囲の広い父の代行で葬儀に出席するなど多忙を極めた。碩学神田喜一郎は「鉄斎翁が何一つ煩わされることなく、真に優遊自適の日を送り、あれだけの偉大な画業を完成せられた裏面には、桃華先生のそうした犠牲があったので、それは今日も知る人が少ない。わたくしは、鉄斎翁と桃華先生ほど、美しい親子はないと思っている」と述べている。謙蔵の日々の煩雑さは、おそらく親しい友人をしても想像におよばないほどであったろう。

京都学派と謙蔵 明治32年12月、京都帝国大学附属図書館が開設される。初代館長に就任した島文次郎は、蔵書家として名高い鉄斎を早速に訪ね、この折に謙蔵とも知遇を得たと思われる。富岡家、山本行範、熊谷浅磨、山田永年などに代表される京都の蔵書家たちは、筐底に秘した和漢籍に関する広範な知識を養っていた。千年の都に根付いた文人文化を矜持とする知識人と、新設されたばかりの国家の高等教育および研究機関に属する新進気鋭の学者たちが交わることは困難に思われたが、新奇を好む富岡家は知識とコネクションを積極的に提供した。その学殖と功績を買われて謙蔵は、36年に京都帝国大学附属図書館和漢目録の編纂を嘱託される。附属図書館の和漢籍蒐集と39年の文科大学開設に富岡家が果たした役割の大きさは、恩恵にあずかった多くの人々が認めるところであろう。

明治37年2月、謙蔵は附属図書館の任を解かれると、5月には浄土宗第五教区宗学教校国語科教員となり39年3月に退職するまで務めた。そして41年9月1日に京都帝国大学文科大学講師を嘱託されてからは、中国金石学と宋代史の講義を受け持ち、内藤湖南、狩野君山とともに東洋史学分野における京都学派の発展の一翼を担うことになる。「校勘家トシテノ楊氏ノ功業」（楊守敬追悼会 1915）、「金石文字ハ書道ノ基礎ナルコトヲ論ズ」（平安同好会 1918）、「日本出土の支那古鏡」（京都帝国大学夏期講演会科外講演 1916）、蓄音機を使用した「支那現代第一名伶譚鑫培」（支那学会公会講演 1916）、幻灯機を使用した「清初ノ画家ヲ論ズ」（京都帝国大学夏期講演会科外講演 1918）などを講演会や学会で発表した。蓄音機や幻灯機を持ち込んでの講義



富岡家宛謙蔵書葉 明治44年4月28日付

は当時としては画期的で、また支那学会第四回公開講演会（1917）において所蔵の《景教一神論》（武田科学振興財団杏雨書屋）巻三の残巻を披露したことは、人々を驚嘆させたという。

中国遊学 謙蔵は、父鉄斎が憧憬の念を抱きながらも一度も渡ることのなかった中国へ四度出かけている。明治43年には京都帝国大学から内藤湖南、小川琢治、狩野君山、濱田耕作らと北京に派遣され、敦煌文献および清内閣旧蔵書の調査を行い（No.64「遊清日誌」）、45年には内藤湖南、羽田亨と奉天（瀋陽）へ派遣され、宮城内の古文書の撮影にあたったことは諸書に詳しい。しかし44年4月から5月にかけて南清へ派遣され、蘇州、杭州、金陵、京口各地で学術調査を行ったことは『京都大学文学部五十年史』では確認できない。報告をかねて作成された4枚の絵葉書「江南夢影」の挨拶状には「拜啓 小生儀今春復じ京都帝国大学ヨリ学術研究ノ為南清に出張ヲ被命 蘇杭金陵京口ノ各地を巡遊 到ル処在留同胞諸君並ニ清国紳士ノ親愛ナル芳情ニヨリテ 想像以上ノ結果ヲ収メ候キ 斯ニ旅中所得写真ノ二三ヲ複製シテ忘レ難キ春夢ノ泡影ヲ留メ 同好ノ一祭ニ供シ候 富岡謙蔵頓首 明治四十四年夏」とある。謙蔵が派遣された経緯や同行者は現在のところ不明だが、旅先から日々何通も送られてくる家族宛の書簡からは単独での派遣と推察され、金陵の宋文帝長寧陵、明太祖孝陵などの旧跡を訪れ、杭州においては文瀾閣の四庫全書を閲覧し、また上海に移住していた長尾雨山と会ったことがわかっている。雨山は、大正3年（1914）に帰国し京都の富岡家の近隣に居を構えた。《西湖遠眺図》（No.21）は扇子の表面に鉄斎が西湖の景を描き、裏面には謙蔵が武林に遊んだ折に同伴した雨山が詠んだ「西湖十首之二」を書す合作であるが、こうした謙蔵の学友たちが鉄斎晩年の忘年の友となった。また謙蔵・雨山共催になる蘇東坡の生日を祝う寿蘇会をはじめ、京都学派が中心となって次々と催した展示会や雅会に鉄斎は喜んで参加し、時々の趣向に適った作品を遺している。《蘇子笠展図》（No.23）は丙辰寿蘇会（1917）に出品された作で、謙蔵が中国から持ち帰った土産の拓本（No.82）を典拠に描いた図である。



23 蘇子笠展図

大正6年3月、謙蔵は私的に華中へ赴いた。上海では辛亥革命で羅振玉と日本に逃れ京都に仮寓していた王国維（5年に帰国）と会し、呉昌碩に依頼した鉄斎の印二顆「富岡百鍊」「鉄斎外史」と「丁巳春仲 桃花先生属」の識語がある《桃花図・聯》（京都国立博物館・富岡コレクション）を持ち帰った。四度の渡中で謙蔵が持ち帰った数多の漢籍、文物、拓本などは鉄斎を大いに喜ばせ、晩年の書画制作の原動力となった。

大正7年9月末、謙蔵は癌のため病床につく。この年は多忙で5月3日には前年に父鉄斎が帝室技芸員を拝命したのを受けて、知友と家族が集う謙蔵主催の祝賀会が行われ、9月24日には家学である石門心学の祖石田梅岩の175年祭並前年正五位追贈奉告祭を催した。次いで10月12日には、呉歴没後200年を記念して四王呉俔展を開催する運びであったが、病に倒れ果たされることはなかった。謙蔵は杖の力が必要になっても、毎朝必ず両親の隠居所に挨拶に行ったという。ほどなくして12月23日に46歳で永眠、25日に密葬、27日に寺町四条大雲院に於いて本葬が執り行われた。

83歳にして嗣子を喪った鉄斎は「謙蔵が居らんようになって見ると、わしもまだなかなかもうろくするわけには行かんわい」と寡婦となったとし子に語ったという。現在、西京区の是住院内にある墓石には、鉄斎の原跡になる「富岡謙蔵之墓」（No.68）とある。発表に到った論考は少なく、没後に刊行された『四王呉俔』（No.86）、『古鏡の研究』、『桃華盞古鏡図録』（No.88）が著述としてしられている。（柏木知子）

【主要参考文献】

『京都大学文学部五十年史』（京都大学文学部 1956）／『京都大学附属図書館六十年史』（京都大学附属図書館 1961）／神田喜一郎「支那学者 富岡桃華先生」（『敦煌学五十年』二玄社 1960）、同「鉄斎逸事」（『図書』第226号 1968）／富岡益太郎「父富岡桃華」（『冊府』第14、16～21号 叢文堂 1961～65）／富岡益太郎「祖父鉄斎の思い出」、富岡とし子「父・鉄斎のこと」、富岡冬野「祖父・富岡鉄斎」（『鉄斎の思い出』鉄斎研究所 1973）／日比野丈夫「鉄斎と京都学派」（別冊『墨』第10号「富岡鉄斎 人と書」芸術新聞社 1989）／杉浦利之『夭折の大学者 富岡謙三—親交の書翰集—（含鉄斎翁書翰三通）』（柳原出版 2008）

《出品目録》

[富岡鉄斎作品]

番号	名 称	制作年	年齢	寸 法	材質・彩色	員数	備考	
1	奴図	慶応3	1867	32	113.8×47.0	紙本淡彩	1幅	大田垣蓮月歌賛
2	花瓶図	明治2	1869	34	135.5×30.6	紙本墨画	1幅	大田垣蓮月歌賛
3	大田垣蓮月像	明治10	1877	42	102.5×43.2	絹本着色	1幅	
4	我愛吾廬図	明治10	1877	42	163.8×52.2	統本着色	1幅	
5	淡彩山水図	明治11	1878	43	149.7×68.0	紙本淡彩	1幅	
6	蘭亭曲水図	明治17	1884	49	135.4×50.4	絹本着色	1幅	
7	古うつゝの篇の細道図	明治23	1890	55	31.0×324.4	紙本淡彩	1巻	
8	習字帖		50代	29.0×760.0	紙本墨書	2帖		
9	玻璃版龍城石刻拓並柳宗元像	明治32	1899	64	拓 26.8×49.0 画 29.7×47.8	紙本玻璃版 紙本淡彩	1幅	
10	憚南田墨帖	明治30	1897	62	各29.4×510.0	紙本着色・墨書	2帖	
11	双寿搗餅図	明治33	1900	65	136.2×44.7	紙本墨画	1幅	谷鉄臣賛
12	山居静適図	明治44	1911	76	141.5×41.8	絹本着色	1幅	
13	静楽帖	大正2	1913	78	各径14.3	紙本着色	1帖	
14	摸石清山水画冊	大正3	1914	79	各36.2×40.5	紙本淡彩	1帖	
15	高芙蓉逸事巻	大正3	1914	79	24.0×804.0	紙本墨書	1巻	
16	豎石點頭図		70代	132.5×33.5	紙本着色	1幅		
17	慈能制猛図		70代	122.5×34.0	紙本着色	1幅		
18	蓮整絶頂図		70代	16.0×43.8	紙本着色	1本(扇子)	裏面:鈴木豹軒書(1911)	
19	帰樵図		70代	15.2×45.0	紙本墨画	1本(扇子)	裏面:狩野君山書(1912)	
20	富而不驕図		70代	14.2×40.5	紙本着色	1本(扇子)	裏面:内藤湖南書(1912)	
21	西湖遠眺図		70代	15.0×42.2	紙本墨画	1本(扇子)	裏面:長尾雨山書(1912)	
22	佳実図	大正4	1915	80	129.4×29.9	紙本着色	1幅	
23	蘇子笠履図	大正6	1917	82	146.4×61.0	紙本淡彩	1幅	
24	王元之竹樓記図	大正6	1917	82	169.6×70.8	絹本着色	1幅	
25	東坡談図	大正7	1918	83	各26.2×37.4	統本着色	1帖	
26	古仏龕図 添聯	大正7	1918	83	133.0×45.5	紙本着色・墨書	3幅	
27	草聖図	大正7	1918	83	134.5×32.5	紙本墨画	1幅	
28	寿蘇集	大正5-7	1916-18		各24.5×37.0	統本墨画・墨書	2帖	
29	葛井故宅図	大正8	1919	84	116.5×42.2	絹本着色	1幅	
30	孔明躬耕図	大正8	1919	84	131.4×47.9	紙本淡彩	1幅	
31	鞆川雪景図	大正8	1919	84	133.6×64.4	紙本淡彩	1幅	
32	東坡笠履図	大正9	1920	85	145.7×40.0	紙本淡彩	1幅	
33	懷素書蕉図	大正9	1920	85	129.1×31.7	紙本淡彩	1幅	
34	読書立志図	大正9	1920	85	132.0×34.5	紙本淡彩	1幅	
35	漁邨暮雨図	大正9	1920	85	131.0×32.3	紙本墨画	1幅	
36	南極寿老星図 添祝寿聯	大正9	1920	85	132.5×52.0	紙本着色	3幅	
37	澆墨山水図	大正9	1920	85	径57.0	絹本墨画	1幅	
38	寒山拾得図	大正9	1920	85	143.8×49.8	紙本淡彩	1幅	
39	高野山地蔵尊建立餅撒記	大正9	1920	85	93.0×28.0	紙本淡彩	1幅	
40	頼氏山紫水明荘図	大正10	1921	86	28.8×41.7	紙本墨画	1幅	
41	伏魔大帝関雲長像	大正10	1921	86	132.8×51.5	紙本着色	1幅	
42	壳書船図	大正11	1922	87	130.0×32.1	紙本淡彩	1幅	
43	魁星閣図	大正11	1922	87	37.9×52.4	紙本墨画	1幅	
44	前赤壁図	大正11	1922	87	155.2×43.0	紙本淡彩	1幅	
45	赤壁四面図	大正11	1922	87	155.6×42.7	紙本淡彩	1幅	
46	後赤壁図	大正11	1922	87	146.6×40.4	紙本淡彩	1幅	
47	東坡閑居図	大正11	1922	87	153.5×42.8	紙本着色	1幅	
48	嫦娥奔月図	大正12	1923	88	132.6×53.6	紙本淡彩	1幅	
49	武陵桃源図	大正12	1923	88	155.5×43.0	絹本着色	1幅	
50	瓢中快適図	大正12	1923	88	132.2×31.8	紙本淡彩	1幅	
51	西王母像	大正12	1923	88	131.0×47.0	紙本着色	1幅	
52	朱梅図	大正12	1923	88	150.4×40.1	紙本淡彩	1幅	
53	梅華書屋図	大正13	1924	89	145.6×40.1	紙本着色	1幅	
54	西湖全景図	大正13	1924	89	141.2×39.0	紙本淡彩	1幅	
55	溪居読書図	大正13	1924	89	145.1×39.1	紙本淡彩	1幅	
56	扶桑神境図	大正13	1924	89	144.5×39.3	紙本着色	1幅	
57	山紫水明処図	大正13	1924	89	32.5×133.8	紙本墨画	1面	

58	魁星閣図絵具皿	大正10	1921	86	23.0×15.5×15.5	1組(12枚)	磁器：初代諏訪蘇山
59	魁星図絵具皿	大正10	1921	86	19.0×15.5×15.5	1組(11枚)	木器：中島菊齋
60	赤壁会所用煎茶具	大正11	1922	87	水指 16.0×19.5×11.4 菓子鉢 9.0×16.7×16.7 茶心壺 11.5×5.2×5.2	1式	水指・菓子鉢：鉄斎絵・六代高橋道八作 茶心壺：鉄斎絵・内藤湖南書

[富岡謙蔵関係資料]

番号	名 称	筆者等	制作年	寸 法	材質・彩色	員数	備考
61	富岡建三平安義巖退學届	富岡鉄斎	明治18 (1885)	27.4×38.7	紙本墨書	1枚	
62	甲州旅行記	富岡謙蔵	明治23 (1890)	24.6×16.5ほか	紙本墨書	2冊のうち	鉄斎校閲
63	富岡謙蔵履歴書草稿	富岡謙蔵	明治40年代前半	27.8×39.2	紙本墨書	1枚	
64	遊清日誌	富岡謙蔵	明治43 (1910)	23.4×16.2	紙本墨書	1冊	
65	富岡鉄斎宛書簡	富岡謙蔵	明治30 (1897)	17.5×112.0	紙本墨書	1幅	
66	富岡家宛書簡	富岡謙蔵	明治～大正時代	13.7×8.7ほか	紙本墨書	一括のうち	書簡箋、絵葉書
67	富岡謙蔵所用印	桑名鉄城ほか	明治～大正時代	1.3×1.3ほか	石製/木製	4顆	「謙」[君搦齋定]印ほか
68	富岡謙蔵墓碑拓本	原跡：富岡鉄斎	大正8 (1919)	各53.0×23.2	紙本墨拓	2幅	
69	桃華流水図	原跡：富岡鉄斎	大正8 (1919)	43.0×39.0	絹本印刷	1枚	「桃華居士遺念」袱紗未仕立
70	富岡桃華君追悼会記念葉書		大正8 (1919)	各14.3×9.1	紙本印刷	6枚	
富岡謙蔵筆原稿・写本、遺品などのうち							

[旧富岡文庫]

番号	名 称	筆者等	制作年	寸 法	材質・彩色	員数	備考
71	不誦五千卷書者無得入此室書	山本竟山	大正3(1914)頃	29.8×128.5	紙本墨書	1面	
72	楷書七言聯	山本竟山	大正時代	各134.7×32.0	紙本墨書	2幅	
73	掃心図画序文	長尾雨山	大正10 (1921)	36.5×135.0	紙本墨書	1幅	富岡鉄斎箱書
74	富岡鉄斎墓誌	長尾雨山	大正14 (1925)	各33.7×49.6	紙本墨書	1幅	
75	賜楓書楼木額	原跡：羅振玉	明治44(1911)頃	25.5×87.3	木製	1面	
76	安蘇居書	羅振玉	大正8(1919)頃	37.0×75.0	紙本墨書	1面	
77	蘭亭叙書	愛新覚羅善耆	中華民國1 (1912)	78.6×18.6	紙本墨書	1幅	羅振玉・内藤湖南箱書
78	曼陀羅窟書	吳昌碩	中華民國2 (1923)	36.0×108.2	紙本墨書	1面	
79	朝川図賦拓本		中国方曆31年(1603)銘	100.4×75.0	紙本墨拓	1幅	富岡謙蔵持帰 鉄斎箱書
80	寿老人図拓本		中国光緒32年(1906)銘	123.8×52.7	紙本墨拓	1幅	富岡謙蔵持帰
81	寒山拾得図拓本	賛原跡：羅聘	中国・清時代	124.0×65.4	紙本墨拓	1幅	富岡謙蔵持帰
82	東坡笠履図拓本	画原跡：陳善武	中国・清時代	126.3×62.8	紙本墨拓	1幅	富岡鉄斎箱書 鉄斎箱書
83	南海東坡笠履像拓本	賛原跡：翁方綱ほか	中国・清時代	112.0×37.2	紙本墨拓	1幅	伊藤介夫持帰
84	張好好詩	秋碧堂本	中華民國時代	36.0×18.6	紙本玻璃版	1帖	内藤湖南・長尾雨山・鈴木豹軒跋
85	寿蘇録	富岡謙蔵・長尾雨山	大正6～10(1917～21)	23.3×13.3ほか	紙本印刷	4冊のうち	
86	四王吳揮	富岡謙蔵	大正8 (1919)	38.3×26.8	紙本印刷	1冊	博文堂発行 鉄斎蔵書印有
87	古鏡の研究	富岡謙蔵	大正9 (1920)	22.2×16.5	紙本印刷	1冊	丸善
88	桃華齋古鏡図録	富岡謙蔵	大正13 (1924)	39.0×29.7	紙本印刷	1冊	梅原未治編

・出品作品は期間中下記の通り2回にかけて展示します。但し一部作品は重複することがあります。

前期 4月2日(火)～5月6日(月祝) 後期 5月11日(土)～6月16日(日)

・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。

4月6日・20日、5月18日、6月1日 各土曜日の午後1時30分より

・次回展覧会 「鉄斎－神仏敬仰－」

平成25年9月14日(土)～12月1日(日)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>